

# The Leading Characters in *Pierre or, the Ambiguities* (I)

池 田 正 博

この小論では Lucy, Pierre, Isabel それぞれの存在性格と、その与えられている意味、及びこれら三者の間の関係について若干の考察を試みたい。

巻頭まもなく次のような描写が用意されてあるが、この象徴的な描写は Lucy, Pierre, Isabel 三者及びその関係を最初に単的に示しているものであることが、明らかとなる。

As touched and bewitched by the loveliness of this silence, Pierre neared the cottage, and lifted his eyes, he swiftly paused, fixing his glance upon one upper, open casement there. Why now this impassioned, youthful pause? Why this enkindled cheek and eye?

Upon the sill of the casement, a snow-white glossy pillow reposes, and a trailing shrub has softly rested a rich, crimson flower against it.

.... shaking the casement shrub, he dislodged the flower, and conspicuously fastened it in his bosom. "I must away now, Lucy; see! under these colours I march." <sup>1)</sup>

まず、窓敷居の上の "snow-white glossy pillow" は、Lucy の存在性格を明らかにする Lucy の居間の描写に登場しているものであり、Lucy を表わしているものである。Picnic の帰途 Lucy の家に立ち寄った Pierre は、Lucy に頼まれて彼女の部屋に "blue portfolio" を取りにゆく。Lucy の部屋は、これまで Pierre が "feelings of a wonderful reverentialness" を持たずには入ったことのないところであり、Pierre にはその部屋のカーペットは "holy ground" の様に思えるのである。まず Lucy の部屋そのものは、＜神聖な場＞として表わされているのであるが、このことは Pierre の今見たような思いによるばかりではない。カーテンの裾から覗いている為に、Pierre に Lucy がやってくると思わせ、彼を驚かせる Lucy の "slipper" もこのような Lucy の部屋を象徴しているものである。即ち、Lucy の "slipper" は「神いたまいけるは、ここに近よるなかれ、汝の足より靴を脱ぐべし、汝が立つところは清き地なればなり」を意味しているものである<sup>2)</sup>。Pierre は、"snow-white ded" の上にある "snow-white ruffled roll" の "sacred secrets" を解きたいと願うが、自分に取りに来た "blue portfolio" 以外のものには手を触れることが出来ない。しかし Pierre は持ってきた "blue portfolio" を開けたいという衝動にかられる。Lucy の意義深い返答、及びそれに引き続く描写は次の通りである。

"Open it!" said Lucy --- "why, yes, Pierre, yes; what secret thing keep I

from thee? Read me through and through. I am entirely thine. See!” and tossing open the portfolio, all manner of rosy things came floating from it, and a most delicate perfume of some invisible essence.

“Ah! thou holy angel, Lucy!”

“Why, Pierre, thou art transfigured; thou now lookest as one who—why, Pierre?”

“As one who had just peeped in at paradise, Lucy; and——”<sup>3)</sup>

“portfolio”は、Lucy自ら“read me through”と述べているように、Lucyの存在性格を表わしているものであり、Pierreにとっては“roll”に他ならないのである。そして“portfolio”から漂い出たものはPierreが解きたいと願った“roll”の持つ“sacred secrets”の実体である。さて、“rosy things”とは、キリスト教の聖母を意味する＜純潔のバラ＞、＜神秘のバラ＞を意味するものであり、又“a most delicate perfume of some invisible essence”とは＜純潔のバラ＞の天上的性質を表現しているものである。又、“portfolio”の“blue”は“heaven’s own blue”を意味するものに他ならない。“portfolio”から漂い出たものに接した後のPierreの驚きの言葉も示しているように、“portfolio”はLucyが“invisible”な、即ち霊的な、天上的性格のみを与えられた存在であることを最初に明確に物語っているものである。そして、先にみた“slipper”はこの様な“invisible essence”としてのLucyを表わしているものであり、“slipper”がPierreに与える「驚き」が本質的に＜含意＞するものは、“portfolio”の与える「驚き」に他ならない。“pillow”の傍らにある“roll”は“portfolio”と同じ意味を持っているものであり、すでに指適されているようにLucyの霊的な“invisible essence”を意味する<sup>4)</sup>。“bed”の上に、“roll”の傍らにある“pillow”はこのようなLucyの天上性を表わしているものに他ならないのである。Pierreが窓敷居のLucyの“snow-white glossy pillow”を見つめ、ふと思案するのはPierreにとってLucyは、Pierreが後にIsabelとは見せるような《人間的な接触》を持ち得ない存在であるからである。LucyがPierreに対して真に異性としての存在の意味を持たないということは、PierreとMrs. Glendinningとの間のsister-brotherという関係が、Lucyとの婚約後も維持されていることにも窺える。PierreのこのMrs. Glendinningとの関係は精神的なものにとどまるものではあるが、＜性的＞なものに他ならないのである。Lucyに対して持つべきPierreの関係は、“docile”なLucyに対して性的優越感を抱いているMrs. Glendinningとの関係によってとって代わられており、このようなPierreの対人関係は、いわゆる＜mother complex＞という問題を提起しているものではある。しかし、Pierreのこの対人関係は＜mother complex＞という＜定規＞以前の、“Enceladus”の章に於て明確に述べられている＜天上性と大地性＞という観点から眺められなければならないものである。Pierreの父の最も親密な友人の娘であり、Pierreとはindirect cousinshipの間柄であるLucyは、Pierreにとって異性としての存在ではなく“saint”としてのPierreの内に生きている父を意味する。Pierreにとって“holy angel”であるLucyはPierreの亡き父の天上的性格の姿態としての意味を持つものである。他方、Mrs. Glendinningは普通の人間としての性格を与えられた存在であって、Pierreに対してLucyの持つようなメタフィジカルな意味を与えられてはいない。しかし彼女は、Pierreとの“sister-brother”という関係に於て、人間Pierreの大地性を露わにしている存在である。Pierreの二元性の一方はLucyとの関係によって表わされ、他方はMrs.

Glendinning との関係によって明らかにされているのである。“Would Mrs. Tartan set about match-making between the steel and magnet?”<sup>5)</sup> と Pierre と Lucy の存在性格の相違は、既に二人の出合いに於て暗示されているが“*This to be my wife?*”という文句を含む Pierre の独白は二人の存在性格の相違及び人間的な次元に於るその相違に Pierre が気づいている事を明らかにしている。＜性＞とは Pierre を“150 pounds”の重さの人間としてあらしめるものであるが、“angelicalness”としての Lucy は、“I am of heavy earth”と述べる Pierre のこの独白に於て、“this”と表わされ“she (is) of airy light”と述べられている。後に Isabel が“heavenly magnet”を感じさせる Pierre に対して“*Thy catching nobleness unsexes me*”<sup>6)</sup>と語るように、天上的性格そのものは＜無性＞として表わされる。Lucy との結婚は“impious”なものであるとする Pierre は、自らを“Pro-serpine”を勾かす“Pluto”にたとえているが、このようなたとえも Pierre が自己と Lucy との差異に気づいていることを示すものである。天上性のみを与えられている Lucy に対して、Pierre は普通の人間として大地性と天上性とを与えられているのであるが、このような存在性格の Pierre は“trailing shrub”によって象徴されている。即ち、“snow-white glossy pillow”にそっと深紅色の花をのせている“trailing shrub”は、Lucy を象徴する“snow-white glossy pillow”との対比に於て、Pierre を表わしているものであり、“crimson on flower”は Lucy の存在性格とは異った Pierre の一性格を示すものである。Lucy は他の場面に於て linnet にたとえられているが、“crimson flower”の意味を linnet の特徴に見ることができる。Pierre の婚約者である Lucy は春になると自分の住む都会から田舎に移り住みたい衝動にかられ、数年前から Saddle Meadows の叔母の家で数ヶ月を送るという習慣を持っている。linnet のたとえば Lucy のこのような習慣が、広野を好み移住する linnet の習性に似ていることによるのであるが、次の様な linnet の特徴に注目したい。交配期の間、雄の linnet の桃色がかった胸部及び頭部は深紅色に変化するが、雌の linnet にはこのような変化は見られない。Pierre を象徴している“crimson flower”が意味するものは、雄の linnet の＜深紅色＞の示す意味と同じものである。即ち性的な存在としての Pierre を表わしているものである。雌の linnet には色の変化が見られないのと同じように、Lucy には彼女の天上性に帰属しないような性格は最後まで窺われない。しかし Pierre は、Lucy とは異って雄の linnet が＜深紅色＞に変わるように、彼が天上的性格を持つと共に性的な存在でもある事を露わにするのである。Pierre は朝の散歩の途上で立ち寄った Lucy のもとを去る時、“crimson flower”をとって自分の胸にとめ、“I must away now, Lucy; see! under these colours I march.”と述べている。かつて高名な将軍を生んだ Glendinning 家の嗣子 Pierre のこの言葉は Lucy には婚約者の冗談としか聞こえてはいないが、Pierre の Lucy からの離心、Lucy とは正反対の特徴を持つ Isabel への傾斜を示すものである。即ち Pierre を表わす“crimson flower”は Isabel を表わすものででもある。“snow-white glossy pillow”と“crimson flower”とは強烈な対照をなすものであるが、この対照は Lucy の“portfolio”と“face”との間に見られる対照である。Isabel は Lucy とは異って＜性的＞な存在であるが、彼女の本質的な存在性格は、まずこの“face”によって暗示されている。Pierre は Lucy の存在性格を示している“portfolio”に接して驚きの声をあげ、早々に Lucy の許を辞去する。帰宅した Pierre は Mrs. Glendinning の不在を知って近くの川堤に出かけるが、この川堤にある“pine-tree”に彼は、神秘的で曖昧な少女の“face”を感じとる。“face”は、Lucy が Saddle Meadows に

やってくる以前に、Pierre が Mrs. Pennies の家で会った縫い子に、即ち後に判明する Isabel に由来するものである。Lucy と分れてきた直後の Pierre は、以前から彼の脳裏に浮ぶ“face”を Lucy との対比に於て“pine-tree”に感じとっているのである。“face”は専ら暗い真理と運命とを Pierre に予告しているものとして描かれており、Isabel の本質的な存在性格そのものを明確に表わしているものではない。しかし Isabel が Lucy とは対照的な性格の存在であることは十分に物語っている。Pierre にとって“face”は“invisible agencies”, “shapes of air”であり、又“In natural guise, but lit by supernatural light; palpable to the senses, but inscrutable to the soul”<sup>7)</sup> と思えるというのである。“face”が Pierre に与える印象や、Pierre の“face”に対する対話的独白は、Isabel が超自然的な要素を持つ存在であることを窺わせる。しかし“face”よりもむしろ Pierre に“face”を感じとらせる“pine-tree”そのものの方が、より厳密に Isabel の本質を暗示している。“pine-tree”そのものへの Pierre の対話的独白のうちに次の様な文句がある。

How wide, how strong these roots must spread! Sure, this pine-tree takes powerful hold of this fair earth! Yon bright flower hath not so deep a root. This tree hath outlived a century of that gay flower's generations, and will outlive a century of them yet to come.<sup>8)</sup>

“pine-tree”はおおよそ生や死を持たず、しかも大地にその存在の根を強靱に広く、深く、おろしている〈自然〉であるというのである。明らかに“pine-tree”は Isabel が根源的な、あるいは地底的な自然を表わす存在であることを暗示しているのである。“pine-tree”はそれ独自で Isabel を表わすものであるが、“yon bright flower”と対比して語られている。“face”は Isabel が Pierre の内に大きな存在を占めることを予知させるものであり、この様な“face”を感じとらせる“pine-tree”との対比に於ては、“yon bright flower”は Lucy を象徴するものであると看做することができる。しかし“pine-tree”そのものに対する Pierre の独白の言葉は、専ら〈自然〉としての松の木の存在の様に向けられているのであり、自然を人間と対比した時の言葉に他ならない。“yon bright flower”は、Lucy を象徴するものであるというより、むしろ〈根源的な自然〉としての“pine-tree”との対比に於て、二元的な存在様式を持つ、死すべき人間としての Pierre を象徴しているものであると言える。“face”と“pine-tree”とは Isabel が超自然的な要素を持つと共に根源的な自然を表わす存在であることを暗示しているが、Pierre の眼前に現れた Isabel は Pierre との密会を通して〈性的〉な存在としてクローズ・アップされるのである。この様な Isabel は、Lucy の恋敵であるが何よりもまず彼女と同質の、即ち〈性的〉な存在の Mrs. Glendinning と対立する。Pierre に対して彼の異母姉としての立場を越えた存在となる Isabel は、先にみた Pierre の Lucy 及び Mrs. Glendinning との関係を瓦解することになる。“blue portfolio”に接した後 Mrs. Glendinning を捜す Pierre、Mrs. Glendinning の不在を知って再度外出し、“face”に強く捉らえられていることを露わにする Pierre——先にみたこのような Pierre の〈出合い〉は今みたような意味、役割りを持つ Isabel をよく物語っている。この様な Isabel の存在性格の本質は、Pierre と Isabel との2回目の密会に於て明確に示されている。

“To Pierre’s dilated senses Isabel seemed to swim in an electric fluid; the vivid buckler of her brow seemed as a magnetic plate. Now first this night was Pierre made aware of what, in the superstitiousness of his rapt enthusiasm, he could not help believing was an extraordinary physical magnetism in Isabel.”<sup>9)</sup>

今引用した文で始まる描写は、つまり Isabel から受ける Pierr の印象についての詳細な説明は、Isabel が『地底的自然であり、根源的な意味に於る性』<sup>10)</sup>であることを明らかにしているのである。この様な本質を持つ Isabel が、Lucy とは対極をなす存在であることは言うまでもないが、次の様な一文が単的にこの事を示している。“a power”とは Isabel の “extraordinary physical magnetism” に由来する＜力＞であり、従って “another quarter” は “heavenly magnet” を意味する。“……a power which not only seemed irresistibly to draw him toward Isabel, but to draw him away from another quarter……”<sup>11)</sup> この様なメタフィジカルな意味での Isabel は勿論 Pierre にとって理解できるものではないが、Pierre は Isabel の “physical magnetism” に捉えられていながらも Saddle Meadows を共に離れるまで、Isabel を人間的な次元に於ても十分に理解していない。これは Pierre が Isabel を一応自分の異母姉であると看做していることによるものである。つまり、最初の密会の描写にも示されているように意識上に於ては姉弟としての抱擁とは別個な “caress” という想いは Pierre の内には生じていないからである。従って Pierre の異母姉であることを証する客観的証拠を持たぬ Isabel が自己にとって如何なる存在であるかという Pierre の認識は、彼の “Virtue” という真理の認識と時を一にしてみたらされる。都市に到着後三日目の夜、何か想いに沈んでいる様な Pierre は、彼の部屋に這入ってきた Isabel と抱擁し、“my brother, my brother” と呼ぶ Isabel に “Call me brother no more!” と叫ぶ<sup>12)</sup>。Pierre は “Virtue” について Isabel に教えて聞かせる。Pierre にとって “Virtue” や “Vice” は影にすぎず、それらの影は無から投げられた異った二つの影であり、一切の生と存在は＜夢の夢、その又夢の夢＞であるというのである。Isabel の身許に対する Pierre の疑念はこの様な Pierre の “Virtue” に対する認識に基づくものであり、又この認識は薄くらがりの中での Pierre と Isabel との抱擁を可能にするものである。第2回目の密会に於ては Isabel の “physical magnetism” の故に “I cannot be an open brother to thee, Isabel”<sup>13)</sup> と述べた Pierre は、今 “Call me brother no more!”<sup>14)</sup> という言葉の後に引き続き次の様に叫ぶ。“I am Pierre, and thou Isabel, wide brother and sister in the common humanity,…… no more.”<sup>15)</sup> ＜弟＞と＜義姉＞ではなく、他人としての＜兄弟＞即ち普通の男・女であるというのである。Pierre のこの言葉は Pierre と Isabel との絆の切断を意味するものではない。Isabel は Pierre にとって異性としての存在であるということを、即ち Pierre は自己を捉えている Isabel の魅力は性的なものである事に気づいたことを示しているものである。そして Pierre のこの認識は、ただちに Isabel の影響下に真理への道を行進する Pierre が性的な存在としての自己に気づいたことを意味する。Pierre にとって今や Isabel は女性としての存在となっているのであり、従って Lucy の “pillow” との対比に於て Pierre の一本質を表わすものでもあり、Isabel を表わすものでもあると考えられる “crimson flower” は、＜性＞あるいは＜大地性＞を表わすものであることが明確となる。“they coiled together, and entangledly stood mute.”<sup>16)</sup> これは Pierre と Isabel との抱擁の描写にある

一文であるが、この様な抱擁の持つ imageこそ Pierre を象徴する “trailing shrub” がよく表わしているところのものである。そしてこの様な image は、既に Pierre と Lucy とが出かける picnic の次の様な描写に於ても窺われるのである。

Now, prone on the grass he falls, with his attentive, upward glance fixed on Lucy's eyes. “Thou art my heaven, Lucy; and here I lie thy shepherd-king, watching for new eye-stars to rise in thee. Ha! I see Venus' transit now; —lo! a new planet there; — and behind all, an infinite starry nebulousness, as if thy being were backgrounded by some spangled veil of mystery.”<sup>17)</sup>

この描写は Lucy の存在性格を示しているものではなく、後に Isabel の不思議な目に流星を見ることになる Pierre が Lucy の目の内に “face” を、つまり Isabel を見ていることを示しているものである。Lucy は Pierre のこの言葉に対して眼を伏せ、涙を落し、唇をふるわせるのであるが、これは Pierre が彼女の目の内に彼女とは相入れぬ性格の存在を見ていることに Lucy が気づいているからである。このように、大地に俯伏せになり Lucy の目の内に Isabel を見る Pierre に、先にみた様な image を窺うことができるのである。

以上の様に、既に見たような存在性格を与えられている Lucy, Pierre, Isabel 及び三人の間の関係は、既に作品の巻頭に於る象徴的な描写に暗示されてあるのである。

メタフィジカルな人間などというものは存在しないのであって、Lucy, Isabel はそれぞれ Pierre の婚約者、＜異母姉＞であることはいうまでもない。Lucy は Mrs. Glendinning や Lucy の兄弟の視点を通して眺められる時には清純無垢な乙女、人間としての存在であり、Isabel も彼女の生立ちの中に登場する人物とは＜正常な＞人間関係を持っている娘である。しかし Pierre の視点を通して眺められる時、Lucy, Isabel はそれぞれ、天上性の＜抽出体＞、根源的な性の＜抽出体＞として描写され、人間としての姿態を与えられていながらも現実的には存在しない様な人間となっている。このように、専ら Pierre の視点を通してのみ、その本質を窺わせる Lucy と Isabel は、たびたび指適されているように、Pierre の持つ二元性の両極を表わす存在である。従って、Lucy と Isabel の実際上の出会いは、作品の終り近くに於て Lucy が “the Apostle's” に現われるまで保留されているが、両者の直接の出会いは必ずしも必要ではない。人間の意識を場とする二つの力の抗争は、既に両者の出会いの以前から Pierre に激しい内的葛藤をもたらしているのである。では、このような Lucy と Isabel は、Pierre に対して如何なる役割りをなしている存在であるのか。Pierre に対する Lucy, Isabel それぞれの役割りは、Lucy の手紙の件りに至って初めて明確なものにされている。Pierre に “the Apostle's” への登場を予告する手紙の中で Lucy は、“I feel that heaven hath called me to a wonderful office toward thee” と告げ、更に “give to me of thine own dear strength!” と述べている<sup>18)</sup>。“wonderful office” とは “to serve thee (Pierre) and her (Isabel), to guard thee and her without end.” であり、“dear strength” とは “superhuman, angelical strength” である。自らの天上性を明らかにすると共に Pierre を “heavenly Pierre” と呼ぶ Lucy の手紙は次の様な文句をもって終わっている。

I am coming! I am coming, my Pierre; for a deep deep voice assures me, that all noble as thou art, Pierre, some terrible jeopardy involves thee, which my continual presence only can drive away. I am coming! I am coming! <sup>19)</sup>

Pierre の Isabel 救済という行為は、彼の “deepest angel”, “loftiest behest of his soul” に基づくものであり、それ故に Isabel は Pierre の内に “heavenly magnetism” を感じた。Lucy の手紙は Pierre の “deepest angel” は Pierre に attend し, “some terrible jeopardy” から彼を護るという Lucy の “good angel” に他ならないことを、即ち、Lucy が Pierre の天上性を表わす存在であることを明確に示しているのである。つまり、Pierre の “deepest angel” も Lucy の “good angel” も共に “Whither fled the sweet angel that are alleged guardians to man?” という一文に示されている “sweet angel” と同じ意味、役割を持っているものである<sup>20)</sup>。〈一椀のあつもの〉と引換えにもたらされた “Virtue” に対する認識は、Pierre にとって致命的な作用をなし、極度の衰弱と貧困をも顧みず、〈真理の探究〉の行着いたところを表わす為に心血を注いで著作に没頭する Pierre は、Lucy の手紙が到着した時、精神的にも肉体的にも一種の極限状態に到達しているのである。この様な Pierre の悲惨な状態は結果的には Isabel に起因するのであり、Lucy という存在のみがよく追い払う事が出来るものに他ならないのである。Isabel の “face” を感じる Pierre と共に不吉な感じに襲われて、picnic から帰宅した Lucy が Pierre に “blue portfolio” を取って来てほしい、と頼む場面は次の様に描写されてあった。

.... Lucy called him back, begging him first to bring her the blue portfolio from her chamber, for she wished to kill her last lingering melancholy ....

さて、Lucy の手紙は、人間離れした直感を持って Lucy の本質を言いあてる Isabel と対峙した Lucy に他ならないのであり、Pierre の Lucy の手紙に対する反応及び Pierre の心眼による Lucy, Isabel の把握は Pierre の内で対峙し、Pierre を分裂させる〈力〉として作用する Lucy, Isabel をよく表わしている。Lucy を意味する “some vague, white shape” を捜し求める Pierre が突然出くわす “two unfathomable dark eyes” は 2 回目の密会に於て見せた Isabel の “unfathomed eyes” である。2 回目の密会は Isabel の〈Pierre 呪縛の儀式〉であり、この密会では、Isabel の異様な目は Pierre を呪縛する Isabel 自身をよく表わすものであって、繰り返し語られ強調されていた。Lucy の手紙によって “vast, out-swelling triumphantness” を感じる Pierre は、直ちに Isabel の手の内に再度落ちてしまうのであるが、Pierre に対する Isabel の “two unfathomable dark eyes” は、たびたび指適されているように、Ahab に対するあの〈Fedallah の目〉と同じ役割りを為しているものである。明らかに、Isabel は〈Pierre の現在〉に、Pierre の内に作用する〈力〉であって、Pierre に対して次の様な一文に示されている〈運命〉としての作用を為しているものである。 “Pierre had thought that all the horizon of his dark fate was commanded by him.” <sup>22)</sup> 二元的な存在様式を与えられている人間 Pierre の〈運命〉は、Isabel によって表わされる〈Pierre 自身〉から来るものに他ならないのであり、従って、彼は〈運命〉から逃れることが出来ないのである。 “We shall see if Fate hath not just a little bit of a small word or two to say in this world.” <sup>23)</sup> という一

文が作品の初めに二度繰返し述べられた後、Pierre が自己の〈運命〉となる Isabel の“face”を感じとる、根源的な自然を表わす“pine-tree”が用意されてあった。Pierre の当初の〈道徳的行為〉に対しては〈道徳的自然〉という意味をも持ちうる“pine-tree”は Pierre に“dark fate”という〈力〉をもたらす〈根源的自然〉であることが今や明確となる。Pierre に於ては〈運命〉は、既に指適されているように、根源的な自然に由来するものであるとされている<sup>24)</sup>。Lucy の手紙の件りは Pierre に対する Lucy, Isabel それぞれの持つ意味、役割りを既に明らかにしているが、Lucy が“the Apostle's”で実際に Isabel と対峙した存在となる時、Isabel, Lucy はそれぞれ自らの役割りを如実に演じる。Lucy は、Lucy の立場を“Proserpine”の立場であるとする Lucy の母に対する態度に、Pierre の思いもよらぬ確固とした信念を見せ、Pierre を驚かせる。語りは“Seldom even had the mystery of Isabel fascinated him more, with a fascination partaking of the terrible”と告げる<sup>25)</sup>。Lucy は彼女の“the Apostle's”への登場そのものが物語るように、“signet of heaven”のみに従う不動の信念を持った存在となり、Pierre に次の様な影響を与える。“Pierre felt that some strange heavenly influence was near him, to keep him from some uttermost harm.”<sup>26)</sup> 他方、Isabel は Lucy の眼前で自分が Pierre の妻であることを示す行為を見せ、Pierre がそれを制すると“Look, Lucy; here is the strangest husband; fearful of being caught speaking to his wife!”と述べる大胆な女性となる<sup>27)</sup>。Pierre は Isabel との密会に於て，“... thou dost not pine for empty nominalness, but for vital realness.”と Isabel に対して述べながらも、彼女を便宜的に名目上の妻とした<sup>28)</sup>。しかし Pierre のこの便宜的な方法は、Isabel のかわり知らぬものであって、彼女は Pierre の妻としての“vast realness”を Pierre に求めるのである。事実、Pierre は結果的には無知な Isabel の求める“vast realness”に応えてきているのである。目に“unfathomableness”を見せる Isabel が Pierre に“I have done mad things”と述べるのに対し、Pierre は次の様に語る<sup>29)</sup>。“her”は Lucy を意味する。

.... to the whole world thou art my wife... to her, too, thou art my wife. Have I not told her so, myself? I was weaker than a kitten, Isabel; and thou, strong as those high things angelical, from which utmost beauty takes not strength.<sup>30)</sup>

自分は Isabel の義弟ではない、と述べた Pierre は今、Isabel を妻と呼ぶのであるが、彼は Isabel を異母姉ではなく他人だ、と信じている訳ではない。彼は、異母姉 Isabel は他人であるかも知れぬという強い疑いを、払拭することが出来ないのである。かくて、Isabel を異母姉とも妻ともすることの出来ない Pierre は、Isabel との間に彼と Mrs. Glendinning との関係と同様、〈sister-brother〉という異常な関係を作り出しているのである。Lucy と同じく Isabel は、既に明らかなように Pierre にとって人間的な関係を持ち得ない存在であるが、このような存在であるが為に Isabel は Pierre との関係を異常なものとしているのである。Lucy には〈Isabel〉が欠如している如く、Isabel には〈Lucy〉が与えられていないのである。従って、上に挙げた描写が暗示しているように、Pierre の大地性を、つまり肉体を捉える Isabel は Pierre にとって制することの出来ぬ存在となり又“heavenly influence”という影響を Pierre の天上性に、つまり魂に与える Lucy も Pierre の支配出来ぬ存在となるのである。そして Pierre は、Lucy と Isabel とに捉えら



れた存在となる。しかし、Isabel に “Thy sweet ignorance is all transporting to me!” と述べ、衝動的に彼女の腕を捕えて抱擁することにも窺えるように、Pierre は二つの〈力〉の中間に位置する訳ではない<sup>31)</sup>。Isabel のような “ignorance” に、つまり自分は Pierre の異母姉であると信じながらも、同時に Pierre の妻という立場をもとる様な “ignorance” に、一時的にはあるが身を任せる Pierre は、Lucy よりも Isabel に強く牽かれる存在となっている。Lucy の強い影響を受けながらも Isabel の肉体に捉えられてある Pierre は、肉体に捉えられてある魂であり、彼の苦しみは魂の苦しみに他ならないのであるが、このような Pierre の表わす本質的な意味は、Pierre が Enceladus との自己同一性を認識する “Enceladus” の章に於て明らかにされている。Enceladus の構図は近親相姦という問題をも含んで、Pierre の最終的な姿を説明しているものであるが、更にこの構図は Pierre 個人の説明という枠を越えて、人間一般の生来的な存在境位を明らかにしているものなのである。詳細な語りの中に次の様な文句がある。

... it is according to eternal fitness, that the precipitated Titan should still seek to regain his paternal birthright even by fiece escalade. Wherefore whoso storms the sky gives best proof he came from thither! But whatso crawls contented in the moat before that crystal fort, shows it was born within that slime, and there forever will abide.<sup>32)</sup>

Lucy の強い影響を受けながらも、Isabel に牽附けられる Pierre は “sky” を襲いながらも “moat” の中で這う類の存在に他ならないのである。Pierre の表わす本質的な意味は、厳密に言えば、天上性と大地性とに捉えられた人間ではなく、大地性のうちに捉えられてある天上性を持つ人間の、つまり魂を肉体の内に持つ人間の根本的悲劇的な存在境位であり、魂の苦しみである。

melville にあっては、人間は天上性と大地性、あるいは地底性との根元的な二元性によって、その存在を与えられており、それ故に、大地に在る人間の存在は、本質的に悲劇的であることを免かれ得ないのである。つまり、この人間の悲劇性は、魂の悲劇性に他ならないのであり、大地性は、専ら魂を苦しめるものとして把握されている。従って、根源的な自然は、人間の天上性をも併呑する、つまり人間の存在の一切を支配する『悲情な運命の力』として認識されている<sup>33)</sup>。このような melville の認識を図式的に “Memnon Stone” にみる事が出来よう。“Memnon Stone” の存在状況は次の様に描写されてある。

It was shaped something like a lengthened egg, but flattened more; and, at the ends, pointed more; and yet not pointed, but irregularly wedged-shaped. Somewhere near the middle of its under side, there was a lateral ridge; and an obscure point of this ridge rested on a second lengthwise-sharpened rock, slightly protruding from the ground.<sup>34)</sup>

更に、“Memnon Stone” の一方は地面より 1 インチ位離れているが、他方は辛うじて人間が這い込むくらいの余地を持って、空間に浮んでいる、と説明されてある。Isabel との最初の密会の後、Pierre はこの巨岩の下に身を差し入れ、もし人間が “Fate” に対して

“Russian serf” にすぎないならば、巨岩よ我が上に落ちよ、と叫ぶのである。さて、この巨岩にバランスを与え、支点となっている岩と交差している巨岩の “lateral ridge” は、Pierre の最初の密会の前に示されてある大理石の “sinister vein” を意味するものであると解してよい。人間の大地性を melville は、大理石の柱の “sinister vein” に喩えているのであるが、“lateral ridge” をこの様な意味での “sinister vein” と看做すことが出来るのである。つまり、“lateral ridge” は大地性を表わすものであり、大地から僅かに突き出て “lateral ridge” と交差している岩は、大地性の来所をよく物語っているものと考えることが出来よう。そして、巨岩 “Memnon Stone” はその別命の通り、運命を意味するものであるが、巨岩の下で先にみたような言葉を叫ぶ Pierre は、ついには、運命の手によって悲惨な最後を遂げることになる。この様に “Memnon Stone” に、根源的な自然は、人間に大地性を与えるものであると共に、運命の来所に他ならないとする先にみたような melville の認識と、このような認識から生まれた Pierre という存在を窺うことが出来る。作品そのものが示しているように、melville はこの様な完全に〈定着〉した確固たる認識に拠って、Pierre, Lucy, Isabel という存在を創り出しているものであり、巻頭に於る象徴的な描写も、このような melville の〈定着〉した認識を窺わせるものであると言えよう。つまり、Lucy, Isabel は melville 的人間 Pierre の生来的な存在境位、及びその苦しみの本質を明らかにする為の非人間的な存在であることを、誕生の当初より運命づけられていたのであると言えるのである。

そして Pierre は明らかに、先にみた Melville の信念を表わす為の、所謂 puppet に他ならないのである。そして彼が先にみたような意味だけを与えられた存在ではないことも明らかである。Pierre という作品は Melville 自身が述べている様に、気ままに書かれたものであり、又 story 自体も単純である。<sup>35)</sup>しかし、実に計算された作品であって、Pierre という名前もこの小論に於てみた意味とは別個な Pierre の持つ意味と深い関連性を持っている。この関連性は、作品の主題である『究極的真理の探究』と深いかかわりを持つものであって、看過出来ないような問題であると考えられる。そして、Lucy, Isabel という存在もこの様な作品の主題との関連性に於て眺められなければならない。これらの問題については紙数の都合で次回に於て取上げたい。この小論に於ては、Pierre, Lucy, Isabel それぞれの持つ根本的な意味、及びこれら三者の間の根本的な関係についてのみ考察した。

〔註〕 1 Herman Melville, *Pierre or, the Ambiguities* (New York : Russel & Russel, 1963), pp. 1—2.

2 「出エジプト記」3:5

3 *Pierre or, the Ambiguities*, p. 54.

4 寺田建比古『神の沈黙』p. 159.

5 *Pierre or, the Ambiguities*, p. 37.

6 *Ibid.*, p. 225.

7 *Ibid.*, p. 58.

8 *Ibid.*, p. 55.

9 *Ibid.*, p. 212.

10 寺田建比古, *op. cit.*, p. 221.

11 *Pierre or, the Ambiguities* p. 213.

12 *Ibid.*, p. 381.

- 13 *Ibid.*, p. 267.
- 14 *Ibid.*, p. 381.
- 15 *Loc. cit.*
- 16 *Ibid.*, p. 268.
- 17 *Ibid.*, p. 48.
- 18 *Ibid.*, p. 432.
- 19 *Ibid.*, p. 433.
- 20 *Ibid.*, p. 245.
- 21 *Ibid.*, p. 53.
- 22 *Ibid.*, p. 253.
- 23 *Ibid.*, p. 14. p. 17.
- 24 寺田建比古, *op. cit.*, p. 157.
- 25 *Pierre or, the Ambiguities*, pp. 455-456.
- 26 *Ibid.*, p. 470.
- 27 *Ibid.*, p. 463.
- 28 *Ibid.*, p. 267.
- 29 *Ibid.*, p. 464.
- 30 *Loc. cit.*
- 31 *Ibid.*, p. 465.
- 32 *Ibid.*, p. 483.
- 33 寺田建比古, *op. cit.*, p. 226.
- 34 *Pierre or the Ambiguities*, p. 185.
- 35 *Ibid.*, p. 341.